

# 第一次大戦期イギリスにおける兵士の志願

——募兵プロパガンダの分析を通じて——

庄司 智

はじめに

1. 募兵制とプロパガンダ概観
  2. 戦争の正当性
  3. 兵士のイメージ
- おわりに

はじめに

第一次大戦期のイギリスでは、他の交戦国とは異なり、1916年1月に徴兵制が施行されるまで兵士は募兵制によって集められていた。そして、1914年8月から1918年11月までの約500万人の入隊者のうち、募兵制の期間に入隊したのは約240万人であり、第一次大戦期イギリスにおける入隊者の中の志願兵と徴集兵の割合はほぼ同じということになる(表1)。

では、募兵制のもとに兵士となった人々は、いかなる理由で自ら入隊していったのだろうか。その理由には、退屈な日常からの逃避や戦争が短期で終結するという幻想、冒険心や仲間意識、あるいは失業による経済的理由<sup>1</sup>といった様々な要因が複雑に絡み合っていたであろうが、しかしその中心にあったのは、何よりも、イギリス人としての「義務」や「名誉」と結びついた「愛国心」であったと考えられている<sup>2</sup>。そして、志願者の数が減少していくにあたり、開戦直後の熱狂的な愛国心を取り戻そうとする試みは、個々の事例では成功した部分もあったものの全体としてはうまくいかず、入隊者の数は減少していくばかりであったとされる<sup>3</sup>。

しかし、確かに入隊者の数は全体的には減っていくばかりであったが、それでもなお募兵制の期間に各月10万人前後の入隊者が数えられたということもまた事実である。それゆえ、募兵制における入隊の背景には、愛国的あるいは経済的な問題だけではない要因があり、それを探ることで、当時の社会像をより鮮明に描き出すことが可能なのではないだろうか。

本稿は、このような問題意識のもとに、第一次大戦期イギリスにおける入隊者の動機を新たに検討することを試みるものである。そして、そのために、当時展開された募兵プロパガンダに注目する。その中には、人々を入隊させることに対して影響力を持った、あるいは、少なくとも発信者によって何らかの影響力を持つと考えられていたものが示されており、そこで展開された言説に注目することで、当時の人々を入隊に向かわせたものを描き出すことができるのではないかと考えるためである。

関連する先行研究について述べる。第一次大戦期におけるイギリスのプロパガンダについての研究は、その衝撃の大きさゆえに、戦後早くから研究が進んだ<sup>4</sup>。近年の研究として代表的なものが、サンダースとテイラーによる共著である<sup>5</sup>。これは当時のイギリス政府によるプロパガンダを組織という観点から整理したものであり、戦争末期にイギリスのプロパガンダに革命的变化が起こったとするそれまでの説を見直すなど、政治的お

よび外交的な観点からのプロパガンダ研究として評価されている。しかし、その一方で、国内プロパガンダについては扱いが小さく、またプロパガンダの社会的影響についての視点も乏しい。また、同時期にはヘイストによる研究があり、これはいかなるプロパガンダが行なわれたかという事例の収集が中心であるが、国内で展開されたものにも焦点が当てられているため、本稿においても有用であると考えられる<sup>6</sup>。また、ロップの著作は、プロパガンダを含めて第一次大戦期イギリスの文化全体を扱っており、これまでの研究を概観するにあたって利用価値が高い<sup>7</sup>。

募兵制については、オズボーンやシムキンスによる研究がある<sup>8</sup>。だが、これらの研究は、軍事的な観点から募兵制をみたものが中心であり、その中でプロパガンダが持った意味については、入隊者数の減少を食い止めるにあたっては有効でなかったという位置づけにとどまっている。

また、新しい流れとして、1960年代以降発展してきた社会史や文化史的な研究<sup>9</sup>をふまえて近年盛んになっている、ジェンダーやフェミニズムといった観点からの研究も注目すべきである<sup>10</sup>。しかし、これらの研究は、最終的に女性の社会的位置付けをめぐる点に焦点が当てられているがゆえに、議論の中心が戦争後半や戦後に向けられているものが多く、志願と愛国心をめぐる本稿の関心とは必ずしも一致するわけではない。このような流れの中で、ガレスはジェンダーと戦争との関連について論じている<sup>11</sup>。ガレスの議論では、募兵制、あるいはプロパガンダの構造そのものについてはあまり触れられていないが、徴兵制の導入に関係するイギリスの自由主義の衰退や婦人参政権の問題について論じる中で、募兵制におけるプロパガンダをめぐる議論にも焦点が当てられており、本稿が最も依拠する文献のひとつである。

以上のような研究史を踏まえ、以下、まず第1章では、第一次大戦期イギリスにおける募兵制とプロパガンダについて概観し、続く第2章では、イギリスの参戦の正当性を訴えかけるプロパガンダを、特にドイツに関するものに注目して検討する。そして、第3章では、プロパガンダの中で展開されたイギリス兵士のイメージと、そこから派生した社会的影響について論じる。

なお、本稿でプロパガンダとして検討する史料については、その範囲は限定せず、演説やポスター、パンフレット、新聞記事といったものを場合に依じて包括的に扱うものとする。

## 1. 募兵制とプロパガンダ概観

1914年8月4日にイギリスがドイツに宣戦布告をすると、陸相に就任し、長期戦を見込んで大規模な新型軍の形成を構想したキッチナーの要請のもと、「国王と国は諸君を必要としている」「Your King and Country Need You」という陸軍省の広告が新聞に掲載され、19歳から30歳の男性に対する呼びかけが行なわれた<sup>12</sup>。

これに対して、8月だけで298,923人、9月には462,901人が入隊した。8月31日には初めて一日の入隊者数の合計が20,000人に達し、また9月3日には33,204人が入隊した。8月30日から9月5日までの一週間には、174,901人という、戦時中でも最高の入隊者数が記録された<sup>13</sup>。これは、戦前のイギリス正規軍 Regular Army の人員数が約25万人であった<sup>14</sup>ことを考えると、驚くべき数字であると言えるだろう。

国中を覆った戦争熱により、ロンドンのタクシーに募兵を呼びかけるビラが貼られたり、愛国的集会在地方組織により行なわれたりといった活動がみられた。また、一部では、労働者が入隊しても賃金や職を保証するという形で、雇用者による援助も行なわれた。こうした活動は、それにより集められた人数という点だけでなく、それが陸軍省をはじめとする中央の指示ではなく自発的に行なわれたという点においても重要である。

しかし、入隊者の数字は、1914年9月のピークを境に減少していく。12,527人が入隊した9月11日が、一日の入隊者数が五桁を数えた最後の日であり、その翌週には、一日の平均入隊者数は6,382人まで落ちる<sup>15</sup>。そして、入隊者数の減少に伴い、1915年7月に国民登録法が施行され、16歳から65歳のすべての男女が、職業などについて登録する義務を負うことになった。同年10月には、それをもとに、戦争遂行に必須の職業には従事していないと思われる男性に兵役を勧誘するダービー計画が行なわれる。この計画により入隊者の数は若干の回復を見せるが、それは一時的なものであり、1916年1月には18歳から41歳までの独身男性を対象とした徴兵制が施行されることになる<sup>16</sup>。

それでは、上記のような募兵制の間に、政府はいかなるプロパガンダ活動を行っていたのであろうか。政府が募兵プロパガンダに関与した組織として第一に挙げられるのが、1914年8月31日に設立された、国会募兵委員会 Parliamentary Recruiting Committee (以下 PRC) である。PRC は、戦争勃発時における各種の自発的な募兵への活動をまとめるためのものであると同時に、さらなる入隊を推進するべく、世論や一般市民を動かすための組織でもあった。PRC による募兵プロパガンダの主な方法は、集会の運営や、パンフレットあるいはポスターといった印刷物によるものであった<sup>17</sup>。最終的に、PRC は12,000回の募兵集会を組織し、200種類のデザインのポスターをはじめとする印刷物を約5,400万枚作成した<sup>18</sup>。もっとも、このようなポスターあるいは集会による募兵アピールがどれほどの効果を持ったかということについては、今なおはっきりとした形では明らかになっていない。また、PRCの活動はあくまで募兵制に基づいたものであるため、志願を促す以上のことはできなかったということは注目しておく必要があるだろう。それゆえ、徴兵制の導入により、PRCはその役目を終えることになる<sup>19</sup>。

もうひとつ、政府によるプロパガンダ組織として触れておくべきものがある。それは、1914年9月に設立された、戦争宣伝局 War Propaganda Bureau である。この局は、自由党の議員でジャーナリストでもある C.F.G. マスターマンを指導者として、外務省の管轄のもとに、ドイツのプロパガンダに対抗する目的で設立された<sup>20</sup>。戦争宣伝局の主な活動は、アーサー・コナン・ドイルや H.G. ウェルズといった作家をはじめとする著名人によるパンフレットなどの出版物を使って、戦争におけるイギリスの立場を正当化することであった<sup>21</sup>。

戦争宣伝局の活動は、世論そのものよりも、世論を形成する知識人層を第一の対象として行なわれていた。そのため、大衆への露骨なプロパガンダは避けられるべきであると考えられており、様々な出版物も政府による関与は隠され、あくまで表向きは個人が自発的に書いたように見せかけられた。戦争宣伝局の存在は議員の中でも知られていなかったということに、政府によるプロパガンダへの関与における秘密性が重視されていたことが示されているといえよう<sup>22</sup>。また、プロパガンダは正確な情報に基づくべきであると考えられていたため、戦争宣伝局のスタッフが1914年12月に書いたところによ

れば、「我々の活動は、事実を提示することと、事実に基づいた一般的な議論をすることに限られてきた」ということである<sup>23</sup>。

政府によるプロパガンダ組織の構造は、戦況の膠着状態の継続による国民の戦争への倦怠の進行、あるいは徴兵制の導入といった理由から、1917年2月に、戦争宣伝局に取って代わるものとして、情報部 Department of Information が設立されたことにより、大きく変化することになる。この転換は、戦争宣伝局が行なっていた知識人層を対象とした方法から離れ、より大衆的な、政府の関与を前面に出した方法が取られるようになることを意味した<sup>24</sup>。そして、1917年5月に、情報部によって全国戦争目的委員会 National War Aims Committee が設立され、映画を使用して大衆向けのアピールを行なうなどして<sup>25</sup>、国民の士気を再び高めることが図られた。

このように、政府によるプロパガンダ組織が整えられたのが戦争後半であり、それ以前は政府の関与は表立って明らかにされていなかったことを考えると、募兵に関係するプロパガンダの多くは政府以外の存在に多くを拠っていたと言っていいただろう。その中で、当時のマス・メディアにおいて第一の存在だった新聞は、重要な役割を果たしていた。1870年の初等教育法をはじめとする19世紀末の教育改革により購読層が拡大していたことを背景に、新聞の発行部数は戦時中にさらに上昇した<sup>26</sup>。開戦前のイギリスの新聞には、中立を主張するものと参戦を主張するものとの両方が存在し、決してすべての新聞が即時開戦を主張していたわけではない<sup>27</sup>。しかし、ひとたび戦争が始まると、ほとんどの新聞が戦争を支持した<sup>28</sup>。

その影響力の強さゆえに、開戦後、政府による新聞に対する検閲も行なわれた。1914年8月7日に、当時の海相チャーチルの下院での演説によれば「陸軍省と海軍省によって、信頼される情報が安定して新聞に供給されるために」、新聞局 Press Bureau が設立された<sup>29</sup>。この組織は、キッチナーの「どの情報が危険となり、どの情報がそうでないかということ判断するのは簡単なことではなく、いかなる時も何らかの疑いが存在するため、我々は情報公開を制限することをためらわない」という言葉にみられる陸軍省の姿勢を反映して、前線への記者の派遣を禁止し、正確な情報の伝達を妨げた<sup>30</sup>。そのため、この局は、新聞の側からは「抑圧局」 Suppress Bureau と呼ばれたという。新聞局は、前述のキッチナーの言葉のように、意図的な情報を流すことよりは、あらゆる情報を制限することに重きを置いていた。そのため、結果として、戦争前半のイギリス政府は、プロパガンダのための素材として新聞が持つ能力を活かしきってはいなかったのである。

このように、PRCの活動の手段が集会やポスターといった点に限られていたこと、および、戦争前半のイギリスでは大衆向けプロパガンダを積極的に行なうための組織が整えられていなかったことを考えると、当時の募兵プロパガンダにおいて展開された言説は、政府により世論操作のために意図的に流され、広められたものであるというだけでなく、世論の中で自発的な形で広まっていったという性格もまた強かったと言えるだろう。それでは、このような枠組みの中で、実際にいかなるプロパガンダが展開されたのだろうか。次章以降ではそれを検討する。

## 2. 戦争の正当性

### (1) イギリスの「義務」と「名誉」

開戦時のイギリスにおいて展開されたプロパガンダに大きな影響を与えたものとして、戦前の戦争イメージが挙げられる。当時のイギリスにおいて、戦争経験といえば、帝国のはるか遠い地における戦争についてのものであった。また、パブリック・スクールでは、名誉、忠誠心、騎士道、愛国心、リーダーシップ、それに戦争への心構えといった理念に基づく教育が施されてきた<sup>31</sup>。そして、パブリック・スクールの理念に基づいた愛国的な感情は、前章で述べた19世紀末の教育改革などにより、大衆新聞、小説や演劇、少年雑誌などを通じて、階層を越えて広まっていったのである<sup>32</sup>。それに加えて、同様の理念は、青年運動によっても広がっていった。1914年までに、イギリスの青年男性のうちの41パーセントが、何らかの形で青年団体に所属していたとされる<sup>33</sup>。

こうした要因ゆえに、開戦前、戦争はまだ輝かしいイメージを帯びていた<sup>34</sup>。詩人のルパート・ブルックの言葉によれば、世界は、「古く、冷たく、退屈な」ものであり、そして、戦争は「眠りから目を覚ます」ような、そこからの解放の機会であったのだ<sup>35</sup>。開戦時、多くのイギリスの作家や芸術家は戦争の勃発を熱狂的に迎えたが、その理由には、このような解放をもたらすものという戦争へのイメージがあったと言えるだろう<sup>36</sup>。

このようなイメージのもとに、イギリスが参戦するきっかけとなった1914年8月のドイツによるベルギー侵攻は、プロパガンダの中で、まず第一に、中立国ベルギーを守るための戦争であると主張された。『パンチ』誌が、ドイツを表す棍棒を持った凶徒から、農場への道を果敢に守ろうとする農民の少年としてベルギーを擬人化したように<sup>37</sup>、ベルギーをドイツによる侵攻から救うという点に参戦の正当性の根拠が位置づけられたのである。そして、その中で、専制的で反自由主義的なドイツが、ヨーロッパの市民社会の自由と独立を踏みにじろうとしているというイメージが振りまかれた。

また、それは同時に、ベルギーという国家を守るというためだけでなく、条約の侵害による外交システムそのものの侵害の阻止のためとしても位置づけられた。PRCの「紙くず——プロイセンの背信——イギリスの約束」A Scrap of Paper – Prussia's Perfidy – Britain's Bond.というポスターや<sup>38</sup>、オクスフォード大学の歴史家たちによる、イギリスの参戦の理由を示す書籍などにより<sup>39</sup>、条約を「紙くず」のように侵害するドイツと、それに立ち向かうイギリスというイメージが広められたのである。

しかし、開戦時の熱狂がおさまるにつれて、単に小さな国家、あるいは市民社会をドイツの手から守るための、イギリスの「義務」や「名誉」に訴えかけるだけではなく、より多様なレトリックを用いることが新聞の投書欄などにおいて求められた<sup>40</sup>。当時の募兵ポスターのための広告会社の社員は、「募兵アピールとしての単純な愛国主義は、すぐにその最初の力を失った……我々は、男性をその命を危険にさらさせるようなあらゆる感情に訴えかける必要があった」と述べている<sup>41</sup>。

このように、法を根拠にした戦争の説明は、志願を呼びかけるにあたって限られた影響しか持たないと考えられた。ここにおいて、イギリスの「義務」や「名誉」、および愛国心は、より身近なものとして結び付けられた。その典型的な例は、ロイド・ジョージが1914年9月19日に行なった演説にみられる。そこでは、

「この戦争からすでに姿を現しつつある、とほうもなく偉大で、永続するようなものがあります——それは古いものよりも豊かで、高貴で、より称賛されるような、新しい愛

国心です。国家の名誉というものは、単に弾丸の飛び交う戦場における栄光を維持することにのみ拠るのではなく、それと同様に、銃後を混乱から守ることに拠っているのだという新しい認識が、身勝手さを捨てたあらゆる階級の中に広がるのを私は見ました」

と述べられている<sup>42</sup>。こうして、愛国心と、銃後を守るということが結び付けられるにあたって、外交的な対立としての戦争は、より個人的で家庭的な形で表現された。敵によって脅かされているものは、単に国家に関わる問題ではなくなったのである。

## (2) 「野蛮な」ドイツ

イギリスの「義務」や「名誉」がプロパガンダにおいて身近なものとして結びつけられる中で、ドイツは、小国を侵略して領土拡大を企むような、あるいは、条約を侵害して市民社会を攻撃するような存在としてだけでなく、特に女性や子どもに対して非人道的行為を行なうような存在であるとされた。1914年9月12日の『タイムズ』紙の記事には、

「私達は、保護を求めてきた3人の少女と共にいました。一人は服を何も着ておらず、ドイツ兵に陵辱されたようでした。私は彼女に自分のシャツを着せ、食糧を分け与えました……他の哀れな少女は、両方の乳房を切り取られそうになっていました。幸運なことに、私はそのような行為をしている敵兵を見つけ、300ヤード先からその兵士を撃ち殺しました。そして、この哀れな少女は現在私達と一緒にいますが、私は彼女が死んでしまわないかと心配しています。彼女は非常にかわいらしく、わずか19歳で、スカートしか身に着けていないのです……」

という前線の兵士からの報告が掲載されている<sup>43</sup>。

また、このようなドイツによる非人道的行為は、新聞以外の様々な媒体においても同様に広められた<sup>44</sup>。そして、同時に、ベルギーはしばしば女性らしさと関連づけられた。侵略された国家であるベルギーは、陵辱された女性という形で象徴されたのである<sup>45</sup>。その一方で、ドイツの兵士は、そういった女性を陵辱したり、あるいは子どもを虐殺したりするような男性として描かれるようになった<sup>46</sup>。

こうしたイメージに関連して、1914年12月に、イギリス政府により、「ドイツ軍によりなされたと主張されている、非人道的行為や……侵略された地域における一般市民への虐待、および法律や戦時慣行の侵害の事例」の調査をするための委員会が作られ、そのトップには、以前のアメリカ大使であるブライス卿が指名された<sup>47</sup>。この背景には、もちろん中立国、特にアメリカの世論に影響を与えるためという理由があったであろうが、しかし同時に、非人道的行為についての言説が無差別に流布することを阻止しようとした姿勢が存在した可能性もあるとされる<sup>48</sup>。

ブライス委員会は、目撃者による法廷における宣誓をもとにした61ページの報告書と、目撃者からの聞き取り調査に多くを依拠した、300ページにわたる補遺とを作った。その補遺には、

「男の子か女の子かはわかりませんが、2歳ぐらいの幼児が家から出てくるのを

見かけました。その幼児は8人のドイツ兵が向かってくる通りのちょうど真ん中にやってきました。ドイツ兵は二組で歩いており、第一の組は幼児のわきを通り過ぎました。もう一つの組の左側にいた男性が、その幼児の胃に両手で銃剣を突き刺し、宙に持ち上げ、そして幼児を担いだまま、仲間と一緒に歌いながら去っていきました」

という女性の証言<sup>49</sup>などの、ドイツによる非人道行為を物語る証言が数多く掲載されている。

これらは、1915年の5月に刊行され、30以上の言語に翻訳されて、海外、特にアメリカに送られた。その分量にも関わらず、新聞とほぼ同じ程度の価格で売られたこと、そしてまた、その発行日がドイツによるイギリスの客船ルシタニア号の撃沈からちょうど一週間後であったということなどにより、ドイツの非人道的行為を公的に裏付けるものとして国内外に広められた<sup>50</sup>。また、やや時期はずれるものの、同年10月の、ドイツ軍による看護婦エディス・キャベルの処刑が起こした反響にも、この報告書の影響は少ないと言えるだろう<sup>51</sup>。

こうして、ドイツの非人道的行為をめぐる言説に、公的な裏づけがなされた。市民社会を攻撃すると同時に、女性や子ども、それに家族といったものをも攻撃するようなドイツ兵のイメージは、単なる作り話の中の存在ではなくなったのである。ベルギーの侵略は、その現実的な問題を越えたレベルで、公的な裏づけのもとに、「野蛮なドイツ」による、婦女子への非人道的行為として様式化されたのだ。

こうした事例は、それが直接アメリカの参戦を決定付けたわけではないとされる<sup>52</sup>。それゆえ、従来のプロパガンダをめぐる議論において中心であった、プロパガンダにおいてイギリスは勝利したか否かという論点においては、これらの事例は単純にイギリスのプロパガンダの成功例であるとするにはできないかもしれない。だが、ベルギーにおける非人道的行為がプロパガンダにおいて広められる中で、イギリスはヨーロッパの平和のためだけに戦っているのではなく、女性を、戦争の恐怖、および野蛮なドイツ男性から守るために戦っているものとされた。入隊して戦うことは、ドイツ兵による女性や子どもへの非人道的行為に対抗することであるという、個人に身近で普遍的な意味が募兵プロパガンダに付与されたのである。このことを考えると、これらの事例が持った意味は、決して小さなものではなかったと言えるだろう。

### 3. 兵士のイメージ

#### (1) 理想的な兵士像

これまでに検討したように、プロパガンダの中で、ドイツによる侵害に対してイギリスが果たすべき「義務」や「名誉」だけではなく、女性や子どもへの非人道的行為にも焦点が当てられた。ここにおいて、ドイツ兵の野蛮な男性像が強調されたと言えよう。一方で、イギリス兵の男性像もまた同様に提示された。「町は軍服を着た男性に満ちている。彼らは学校や厩舎、それに各家庭に宿泊しており、たくましく日焼けして外見が良く、戦いを待ち望んでいる」という新聞記事にみられるように<sup>53</sup>、イギリスの男性の「男らしさ」を示すことにより、雄々しい理想的な一般兵士のイメージが形成されたのだ。

こうしたイギリスの一般兵士の理想像であるトミー・アトキンス Tommy Atkins は、

勇気があり、陽気で、勇ましく、公平なものとして描かれた<sup>54</sup>。それは同時に、男らしく紳士的で、性的な魅力を持ち<sup>55</sup>、軍事的であると同時に家庭的であるとされ、プロパガンダの中で展開された「男らしさ」の中心に位置するものであった。例えば、PRCによるポスターでは、老人を助けるイギリス兵の図が描かれている（図1）。ベルギーの都市の破壊や、ベルギーおよびイギリスの女性や子どもに対する陵辱や虐殺といったイメージが暗く描かれた一方で、陽気さや公平さ、勇気、愛国心や家庭への愛といった、イギリス社会を規定する道徳的価値が具体化した形で、理想的なイギリス兵士像が明るく作り出されたのである。これらのイメージは対照的であるが、相互に依存していたのだ。

一方で、入隊しようとしなない男性や、戦うことを拒否した男性は、「男らしくない」ものであるとされた。このような、イギリスの「男らしさ」への憂慮は、ボーア戦争におけるイギリス軍の脆弱さという点にすでに表れている。ボーア戦争は当初の予想に反して二年半以上も続き、イギリスの投入兵力量は45万人にのぼった。ここから生じた憂慮は、新兵の質の低下に対してのものであると同時に、現代文化の中でのイギリスの若者の退廃性についてのものでもあったのだ<sup>56</sup>。第一次大戦の開戦前、そのような憂慮は、イギリスは徴兵制を受け入れるべきかどうかということについての議論のもととなった。多くの自由主義者にとって、徴兵制は、個人の自由の侵害であり、イギリスの自由主義的な過去の否定につながるものであった。しかし、帝国主義者や保守派にとっては、徴兵制は、軍国主義ではなく、「男らしさ」を取り戻す手段としての意味を持っていたのである<sup>57</sup>。

それゆえ、第一次大戦の勃発は、男性の中に「男らしさ」を、女性の中に「女らしさ」を取り戻させるものとして期待された。ここには、戦前の婦人参政権運動の組織の活動の活発化に代表される女性の台頭による、伝統的な「男らしさ」および「女らしさ」という枠組みの崩壊への危惧が生じていたことも関係していたと考えられる。女性の台頭によって伝統的な「男らしさ」と「女らしさ」の領域の区分が危うくなったのは、「男らしさ」が弱まったせいだととらえられたのである<sup>58</sup>。

また、ホモセクシュアルをめぐる議論も「男らしさ」の憂慮と結び付けられた。性的な退廃がイギリスの大義の妨げになり、そして、入隊しない男性の存在は、オスカー・ワイルドらにより実践された悪徳、すなわちホモセクシュアルに帰すると考えられたのである<sup>59</sup>。オスカー・ワイルドの長男は自ら入隊し、西部戦線において1915年5月に戦死した。彼の言葉によれば、「最も大切なことは、僕は男にならなければいけないということだ。退廃的な芸術家や、女々しい耽美主義者、弱々しい墮落者に用はない」いうことであつた<sup>60</sup>。

これらの退廃や悪徳への憂慮が呼び起こされるにつれて、兵士として入隊することは、ベルギーを救うため、あるいは、銃後を守るためということに加えて、「男らしさ」そのものの再生のためという意味を持つようになった。軍務がイギリスの世紀末的退廃の跡を洗い流し、義務、名誉、騎士道、家族といったものと関係する、再生された「男らしさ」を生み出すものと考えられたのである。加えて、それは、理想的な兵士のイメージにふさわしい「男らしい」男性が、自らの果たすべき義務を認識し、死の危険と隣り合わせの戦場へと向かうために入隊する一方で、自ら入隊しようとしなない「男らしくない」男性が銃後に残り、イギリスの子孫を生み出すということへの憂慮にもつながった。そ



してさらに、このことは「男らしくない」非入隊男性への圧力が容認されることをも意味していたのである。

## (2) 非入隊男性への圧力

ドイツによる非人道的行為、あるいはイギリスの男性の「男らしさ」といったイメージがプロパガンダの中で展開されるにあたって、女性や子どもの一般的な描かれ方は、弱く危険にさらされている様子であり、男性の保護を必要とするものであった。PRCによる、「ベルギーを忘れるな」と銘打たれたポスターでは、女性と子どもが燃え上がる村から逃げているところが描かれている（図2）。また、他のポスターでは、ドイツの軍艦に砲撃された家が描かれている。赤ん坊を抱えた少女が瓦礫の上に立っており、「イギリスの男性よ！これを黙って見ているのか？」という文字が問いかける（図3）。

一方、女性たち自身も、男性を送るよう訴えかけられていた。例えば、「ロンドンの女性へ」“To the Women of London”と題されたポスターでは、

「あなたの恋人は軍服に身を包んでいますか？彼がそうであればと思いませんか？あなたや国家のことを、守るために戦う価値があるものであると彼が考えないならば、彼はあなたにとって価値があるような存在ですか？ひとりである女性をあわれむべきではありません——その恋人はおそらく兵士なのです——彼女のために、国家のために——そして、あなたのために戦っている兵士です。もしもあなたの恋人が国王や国家への義務を無視するならば、彼があなたを無視する日も来るかもしれません。これらのことを考えて——そして彼に今すぐ入隊するよう勧めましょう」

と書かれている<sup>61</sup>。こうしたメッセージには、男性は本質的に「男らしさ」の理念に従って自ら入隊するような存在であるが、家族、あるいは女性といった、男性が守るべきものへの道徳的責任感によって、それが妨げられているという前提が存在していたと考えられる。

しかし、それと同時に、プロパガンダの中の女性や子どもはさらに積極的な意味をも持っていた。ふたたびPRCによるポスターを例に取れば、「イギリスの女性が言う——行きなさい！」と女性が呼びかけるものが挙げられる（図4）。また、戦争が終わった後、少女が父親に「パパ、大戦のときにパパは何をしていたの？」と問いかけ、父親である男性が激しく恥じている様子を描くポスターも発行された（図5）<sup>62</sup>。このように、守られるべき存在とされる女性や子どもが、積極的な形で入隊をうながすような形で描かれたのだ。

こうした、単に守られるだけの存在ではない女性のイメージは、募兵集会における演説や新聞への投稿といった点にもみられた。例えば、1914年9月のある地方紙への投稿では、「憤慨したイギリスの婦人」の名で、

「あらゆる女性は、自分の身を守るために、弾薬の装填の仕方や銃の使い方を覚えるべきです。数百もの臆病な雄の野良犬（私は彼らを男性と呼ぶことはできません）が、国家への義務を明らかに無視して日々街をぶらついています……私はそれを見ると、ドイ

ツの野蛮人の大群に侵略されたときに、少なくともひとりの敵を倒し、自分自身の名誉を守り、そして若い雄をそのスカートに隠せるように、女性に自分たち自身を守らせるようにした方がいいのではないかと思います」

という主張がなされたという<sup>63</sup>。この投稿が本当に女性の手によってなされたものかどうかは明らかになっていないが、しかしそれが女性の名の下に行なわれたということは重要な点であろう。こうした形で、入隊しない男性は、もはや「男らしさ」を失った存在であり、女性がそれにとって代わるイメージが生じたのである。

このような「男らしさ」に訴えかける形でのプロパガンダは、政治的立場を超えて行なわれた。婦人参政権運動の組織の活動が戦前に活発化していたことはすでに前節で述べたが、これらの組織も、開戦後、緊急時に国家を支えることは女性の平等や参政権を導くものであるとして、参政権獲得のための闘争を放棄し、募兵運動を支えた<sup>64</sup>。

また、女性作家のオルツイによって、「あらゆる知人の男性に、国家に奉仕することを勧め……健康で自由であるのに国家の呼び声に応えないような男性とは、決して人前に現れない」ことを提唱する女性団体が作られ、約2万人の女性が所属した<sup>65</sup>。ミュージック・ホールや集会といった場でも、女性の出演者によって、歌という形で男性に対する入隊の訴えがなされた<sup>66</sup>。他にも、入隊していないがゆえに、恋人に愛を拒絶されることに脅えている男性も存在したという<sup>67</sup>。このような事例には、「男らしくない」男性への非難と同時に、「男らしい」男性への見返りとして女性の愛が位置づけられていたことが見て取れるといえよう。

さらに、入隊していない「臆病な」男性に対して、女性が白い羽根を渡すという募兵運動も行なわれた。この運動は、1914年8月30日に、C.P.フィッツジェラルド提督によって提唱され、各地の女性に広まり、徴兵制が施行された1916年以降も一部で行なわれた。この運動については、それにより目立った入隊者の増加が起きたわけではないこと、あるいは、こうした運動に携わった女性自身に関する史料が少ないことから、一部の女性による逸脱的な行動であったと考えられてきたが、しかし近年ではそれが男性に与えた内面的な影響は大きかったという評価がなされている<sup>68</sup>。

こういった事例から考えると、プロパガンダにおいて、女性は、「男らしい」男性に守られるべき存在、あるいは、自ら入隊する「男らしい」男性に対する見返りとしての存在であった一方で、同時に、義務を果たさない「男らしくない」臆病者への非難の根拠や、さらには彼らの告発者でもあったとすることができる。そして、こうした意味は、女性のみが持ちえたものであったということも、また重要であろう。このようにして生み出された、「男らしい」男性の理想像たる兵士のイメージの賞賛と、そのようなイメージに自らを重ね合わせることのできない「男らしくない」非入隊男性に向けられた社会的な圧力は、男性を志願へと導いたものについて考える上で決して無視できるものではないのである。

## おわりに

本稿では、第一次大戦期イギリスにおける募兵プロパガンダの構造、およびその中で展開された言説の分析を通じて、入隊者の動機について再検討することをはかった。本

稿で検討したように、募兵プロパガンダにおいて、愛国的な呼びかけやドイツに対しての道徳的優位性が展開された一方で、「男らしさ」と軍務を結び付けたものも同様に展開され、一般兵士たるイギリス男性の理想像が示された。そして、「男らしい」男性像は、そうでない男性、すなわち入隊していない男性への圧力の要因となったのである。

また、こういった言説は、徴兵制ではなく募兵制であったがゆえに展開されたものであるということも無視できない。入隊を呼びかけられる対象であった男性に、拒否するという選択肢が提示されていたことにより、あらゆる男性の内面が試されたのだ。それは、強制的な手段である徴兵制ではなく、自発性に基づいた手段である募兵制であったからこそ生じた強制なのである。

もちろん、これにより、従来主張されてきた「愛国心」や、あるいはその他の失業などの経済的要因といったものが志願者に与えた影響の大きさが否定されるものではない。加えて、これらの「男らしさ」に訴えかけるプロパガンダが、実際に入隊者にいかなる影響をもたらしたかということは、今もって判断が難しい問題であろう。すでに述べたように、数字だけを見れば、募兵プロパガンダは入隊者の数を劇的に増やすことはなく、募兵制は徴兵制に転換していった。

しかし、本稿で検討したように、人々を志願に向かわせることに影響力を持ったものの中に、「男らしさ」に訴えかける社会の風潮が存在したことを見て取ることができるがゆえに、単にイギリスの「義務」や「名誉」と結びついた「愛国心」により熱狂が起こり、それにより人々が入隊していったというだけでは、入隊者の動機、およびその社会的背景を明らかにしたとは言えないであろう。イギリスの男性が入隊した理由とされる「義務」や「名誉」は、国家に対してのものだけでなく、「男らしく」あるべき自分への「義務」や「名誉」でもあったのである。

#### 《註釈》

- <sup>1</sup> 職業別に入隊者数などの経済的な観点からの議論については、J. M. Winter, *The Great War and the British People*, London, 1985, pp. 33-7; P. E. Dewey, "Military Recruiting and the British Labour Force during the First World War", *Historical Journal* 27, 1, 1984, pp. 199-223. などに詳しい。
- <sup>2</sup> J. M. Bourne, *Britain and the Great War*, London, 1989, p. 219; P. Simkins, *Kitchener's Army: The Raising of the New Armies*, Manchester, 1988, pp. 185-187. [以下 *Kitchener's Army* と略す]; 木畑洋一『支配の代償』英帝国の崩壊と「帝国意識」東京大学出版会、1987年、143-146頁。
- <sup>3</sup> Simkins, *Kitchener's Army*, pp. 119-127.
- <sup>4</sup> 戦後初期の研究については、H. Laswell, *Propaganda Technique in the World War*, Boston, MA, 1927 や、J. D. Squires による *British Propaganda at Home and in the United States from 1914 to 1917*, Cambridge, Mass., 1935 などが代表的である。
- <sup>5</sup> M. L. Sanders and P. M. Taylor, *British Propaganda during the First World War, 1914-1918*, London, 1981. [以下 *British Propaganda* と略す]
- <sup>6</sup> C. Haste, *Keep the Home Fires Burning: Propaganda in the First World War*, London, 1977. [以下 *Keep the Home Fires Burning* と略す]
- <sup>7</sup> G. Robb, *British Culture and the First World War*, New York, 2002. [以下 *British Culture* と略す]
- <sup>8</sup> J. M. Osborne, *The Voluntary Recruiting Movement in Britain, 1914-16*, New York, 1982; Simkins, *Kitchener's Army*.
- <sup>9</sup> 代表的な研究として、A. Marwick, *The Deluge: British Society and the First World War*, London, 1965 [以下 *Deluge* と略す]; P. Fussell, *The Great War and Modern Memory*, Oxford, 1975; T. Wilson, *The Myriad Faces of War*, Cambridge, 1986 [以下 *Myriad Faces of War* と略す]; G. DeGroot, *Blighty*:

*British Society in the Era of the Great War*, London, 1996 [以下同著は *Blighty* と略す] ; S. Hynes, *A War Imagined: The First World War and English Culture*, New York, 1991 [以下 *War Imagined* と略す] などが挙げられる。

<sup>10</sup> こうした方向からの研究については、M. R. Higonet, J. Jenson, S. Michel and M. C. Weitz (eds.), *Behind the Lines: Gender and the Two World Wars*, New Haven, 1987; S. K. Kent, *Making Peace: The Reconstruction of Gender in Interwar Britain*, Princeton, 1993; J. Bourke, *Dismembering the Male: Men's Bodies, Britain and the Great War*, Chicago, 1996 といった文献が挙げられる。

<sup>11</sup> N. Gullace, *The Blood of Our Sons: Men, Women, and the Renegotiation of British Citizenship During the Great War*, New York, 2002. [以下 *Blood of Our Sons* と略す]

<sup>12</sup> Haste, *Keep the Home Fires Burning*, p. 50; Simkins *Kitchener's Army*, p. 39.

<sup>13</sup> *Ibid.*, pp. 65-66.

<sup>14</sup> このほか、正規軍が海外で戦ったときの国防を務める国防軍 Territorial Forces が同程度存在したが、それは前線で戦うものとはほとんど考えられていなかった。J. M. Winter, *The Great War and the British People*, London, 1985, p. 29. [以下 *Great War and the British People* と略す]

<sup>15</sup> Simkins, *Kitchener's Army*, p. 75.

<sup>16</sup> Winter, *Great War and the British People*, p. 38-39; 村岡健次・木畑洋一編『イギリス史』第3巻、山川出版社、1991年、260頁。

<sup>17</sup> ある新聞記者は、1915年1月3日のロンドンの光景について、「募兵を呼びかけるポスターは、あらゆる掲示板や窓、バス、路面電車、宣伝車といったものに見られる。ネルソン像の下はそれらで覆われていた。その数や種類は驚くべきものである。あらゆる場所で、キッチナー卿がいかめしく大きな指を示し、『私は諸君を求めている』と声を上げている」と書いている。M. MacDonagh, *In London during the Great War*, London, 1935, p. 51.

<sup>18</sup> Robb, *British Culture*, p. 108. PRC がデザイン、および発行したポスターの正確な総数は明らかになっていないが、イギリスの帝国戦争博物館が所有しているものには176のデザインがあるということである。P. Dutton, "Moving Images?: The Parliamentary Recruiting Committee's Poster Campaign, 1914-16", *Imperial War Museum Review* 4, 1989, p. 46. [以下"Moving Images?"と略す]

<sup>19</sup> 1915年9月に、労働党などにより労働者募兵委員会 Labour Recruiting Committee が設立され、PRC は同年10月のダービー計画に伴ってそれと合併し、共同募兵委員会 Joint Recruiting Committee (以下 JRC) となる。JRC は公式に解散はしなかったが、徴兵制が施行された1916年には、ほぼその活動を停止していたとされる。R. Douglas, "Voluntary Enlistment in the First World War and the Work of the Parliamentary Recruiting Committee", *Journal of Modern History* 42, 1970, pp. 583-585. [以下"Voluntary Enlistment"と略す]

<sup>20</sup> Sanders and Taylor, *British Propaganda*, pp. 38-42.

<sup>21</sup> 開戦後、イギリスの文学界において戦争に反対する声はほとんど存在せず、反対したのはバーナード・ショウのような数少ない例外であった。Robb, *British Culture*, p. 132; Haste, *Keep the Home Fires Burning*, p. 25.

<sup>22</sup> Sanders and Taylor, *British Propaganda*, p. 40.

<sup>23</sup> *Ibid.* p. 41.

<sup>24</sup> G. S. Messinger, *British Propaganda and the State in the First World War*, Manchester, 1992, pp. 49-50; Sanders and Taylor, *British Propaganda*, pp. 63-4. また、情報部は1918年2月に『デイリー・エクスプレス』『グローブ』両紙の所有者であるビーヴァブルック卿を指導者とする情報省 Ministry of Information に格上げされる。

<sup>25</sup> 政府による募兵プロパガンダにおいては映画はほとんど用いられなかった。1915年にPRCは民間の映画会社に募兵のための映画の作製を依頼し、それは『君よ!』*You!* というタイトルで1916年1月に上映されたが、すでに徴兵法が通過していたため、大きな影響は持たなかった。Robb, *British Culture*, p. 108.

<sup>26</sup> 『タイムズ』紙は1886年には一日で約4万5千部を売っていたが、1914年にはその部数は約18万部になった。開戦後、多い日には各紙合わせて600万部以上の新聞が一日に売れたという。Haste, *Keep the Home Fires Burning*, p. 29; Robb, *British Culture*, p. 112.

<sup>27</sup> 例えば、1914年8月1日の記事では、『タイムズ』紙は戦争への準備を訴えているが、それに対して『マンチェスター・ガーディアン』紙は不介入を訴えている。また、同日の『タイムズ』紙の記事でも、参戦に反対する投書が掲載されるなど、決して新聞が戦争ムード一色に染まっ

- ていたわけではないことがうかがえる。Times, August 1; Manchester Guardian, August 1.
- <sup>28</sup> 『マンチェスター・ガーディアン』紙では、開戦直前に発行された8月4日付の記事でも、8月2日にトラファルガー・スクエアで行なわれた平和集会においてケア・ハーディが演説している写真が大きく掲載されているなど、開戦前は中立を訴える記事が多くを占めている。だが、開戦後は、掲載される写真も大部分が軍隊に関係したものになり、戦争反対の言説はほとんど姿を消すことになる。Manchester Guardian, August 4; August 10; August 13. などを参照。
- <sup>29</sup> Sanders and Taylor, *British Propaganda*, p. 20; Haste, *Keep the Home Fires Burning*, p. 30.
- <sup>30</sup> *Ibid.*, p. 33.
- <sup>31</sup> Simkins, *Kitchener's Army*, pp. 19-20. また、パブリックスクールと第一次大戦との関係については、P. Parker, *The Old Lie: the Great War and the Public School Ethos*, London, 1987 に詳しい。
- <sup>32</sup> ソルフォードのスラムで育ったロバーツは、回想録の中で「神話にまで高められたパブリックスクールの倫理は、週刊誌を通じて我々の中に広がり、善と悪についての理念と規範を打ち立てた」と述べている。R. Roberts, *The Classic Slum: Salford Life in the First Quarter of the Century*, Harmondsworth, 1973, p. 161. また帝国意識の浸透の様子については、木畑、前掲書、115-130頁。
- <sup>33</sup> I. Beckett, "The nation in arms, 1914-18", in I. Beckett and K. Simpson (eds.), *A Nation in Arms*, Manchester, 1985, pp. 4-5.
- <sup>34</sup> もっとも、これは開戦前のイギリスが軍国主義的な国家であったということの意味するものではない。愛国心、帝国の誇り、冒険物語といったものは、現実の志願者数の増加や、軍の拡大への世論の支持にはつながらなかった。兵士は、いわゆる「リスベクトラブルな」職業であるとは考えられておらず、実際の軍は人員不足に悩んでいたのである。DeGroot, *Blighty*, pp. 14-30.
- <sup>35</sup> Haste, *Keep the Home Fires Burning*, p. 65.
- <sup>36</sup> エクスタインズはこれに対して、このような解放ととらえる感覚よりも、古い伝統的な価値を護るための戦争ととらえる感覚の方を強調している。エクスタインズ、前掲書、190-191頁。
- <sup>37</sup> *Punch*, August 12, 1914.
- <sup>38</sup> Dutton, "Moving Images?", p. 50.
- <sup>39</sup> Members of the Oxford Faculty of Modern History, *Why We Are at War: Great Britain's Case*, Oxford, 1914, pp. 5, 116-117; Gullace, *Blood of Our Sons*, p. 21.
- <sup>40</sup> Times, August 20, 1914 などを参照。
- <sup>41</sup> Simkins, *Kitchener's Army*, p. 123; Haste, *Keep the Home Fires Burning*, p. 52.
- <sup>42</sup> Marwick, *Deluge*, p. 49.
- <sup>43</sup> Times, September 12, 1914. ヘイストによれば、この記事について、300ヤード先から敵を撃ち殺すことができるものかどうかという議論が交わされたが、それが証明されることはなかったということである。Haste, *Keep the Home Fires Burning*, pp. 84-85.
- <sup>44</sup> W. Le Quex, *German Atrocities: A Record of Shameless Deeds*, London, 1914 が、その代表的なものである。ル・キューは戦前からドイツの脅威に焦点を当てた大衆小説で人気を博していた。
- <sup>45</sup> ルイス・レメカーは、このようなイメージのカートゥーンを数多く描いた。そのうちのひとつでは、「世界に冠たるドイツ」「Deutschland über Alles」という祭壇に横たわるベルギーを表す女性が描かれている。L. Raemaekers, "Germany's Pledged Word," *Raemaekers Cartoons*, London, [n. d], p. 1.
- <sup>46</sup> エドモンド・サリバンによる、「優しいドイツ人」「The Gentle German」と題されたカートゥーンでは、凶暴な兵士が天使を銃剣で突き刺している様子が描かれている。E. Sullivan, *The Kaiser's Garland*, London, 1915. また、『パンチ』誌でも、「ドイツ文化の勝利」と題して、破壊された街に横たわる死体の上で軍旗と拳銃を持っているドイツ兵が描かれたり、ベルギーが傷ついた女性として描かれたりしている。*Punch*, August 26; September 2. このようなカートゥーンによるプロパガンダについては、E. Demm, "Propaganda and Caricature in the First World War", *Journal of Contemporary History* 28, 1993, pp. 163-92; R. Douglas, *The Great War, 1914-1918: The Cartoonists' Vision*, London, 1995 に詳しい。
- <sup>47</sup> J. Home and A. Kramer, *German Atrocities, 1914: A History of Denial*, New Haven, 2001, pp. 231-232. 戦前のブライスは親ドイツ的であり、イギリスの参戦にも反対していた。ベルギーへの侵攻によって彼は中立から転向したが、ドイツは兵士や政治家の軍国主義に問題があるのであり、知識人層は好戦的ではないと考えていた。Wilson, *Myriad Faces of War*, pp. 182-191.
- <sup>48</sup> 例えば、ドイツ兵によって姉が虐殺されたとして、その非人道的行為を新聞に訴えようとした

- 17歳の少女が、虚偽の情報を流布させようとしたことにより裁判で有罪とされるという事件が1914年の12月末に起きた。Gullace, *Blood of Our Sons*, pp. 17-18.
- <sup>49</sup> Committee on Alleged German Outrages, *Evidence and Documents Laid before the Committee on Alleged German Outrages: Being an Appendix to the Report of the Committee appointed by His Britannic Majesty's Government and presided over by The Right Hon. Viscount Bryce, O. M.*, London, 1915, p. 82.
- <sup>50</sup> 戦争宣伝局を指導していたマスターマンからのブライスへの手紙では、「あなたの報告はアメリカを動かしました。あなたもご存知でしょうが、懐疑的であった人々さえも自分たちが考えを変えたことを宣言したのです。あなたによる署名がなされたために！」と書かれている。Gullace, *Blood of Our Sons*, p. 30.
- <sup>51</sup> 連合国軍およびドイツ軍の兵士をブリュッセルで介護していたキャベルは、兵士を中立国であるオランダに逃がそうとしていた罪で、1915年10月12日にドイツ軍により処刑された。このとき彼女は50歳であったが、ある演説の中で「純粹で、公平で、献身的で、かわいらしい少女」として賛美されるなど、プロパガンダの中では一貫して少女として描かれた。Ibid., pp. 99-100; Robb, *British Culture*, p. 36.
- <sup>52</sup> ウィルソンは、ブライスによる報告書やルシタニア号の沈没はアメリカの参戦に決定的な意味を持たず、また、キャベルの事例についても、アメリカはイギリスよりも早くから彼女の死刑の赦免を得るために最大限の努力をしていたことから、アメリカに対するイギリスのプロパガンダがドイツより優勢だったとは言い切れないとしている。Wilson, *Myriad Faces of War*, pp. 743-747.
- <sup>53</sup> *Times*, September 2, 1914.
- <sup>54</sup> イギリスの一般兵士の理想像がトミー・アトキンスと呼ばれるようになった起源については、アメリカ独立戦争やセボイの反乱など、様々な説が主張されているが、いずれにせよそれは南アフリカ戦争の時期にラジャー・キプリングの詩によって一般的になったとされる。Gullace, *Blood of Our Sons*, p. 36.
- <sup>55</sup> 1914年の終わりごろから、若い女性が軍のキャンプの近くでふしだらな行為をするという、軍服熱 khaki fever と称される現象が起こった。これは、女性の熱狂あるいは愛国心を表すものであると同時に、戦争における性的あるいは道徳的な混乱の表れであるとされる。この現象をめぐる議論については以下の論文に詳しい。Angela Woollacott, "'Khaki Fever' and Its Control: Gender, Class, Age and Sexual Morality on the British Homefront in the First World War", *Journal of Contemporary History* 29, 1994, pp. 325-47; Philippa Levine "'Walking the Streets in the Way No Decent Woman Should': Women Police in World War I", *Journal of Modern History* 66, 1994, pp. 34-78.
- <sup>56</sup> Ibid., pp. 40-41. このことが「帝国精神」や「愛国心」の弱体化への懸念につながったという指摘もなされている。木畑、前掲書、33-42頁。また、以下の論文も参照。A. Davin, "Imperialism and Motherhood," *History Workshop* 5, 1978, pp. 9-65.
- <sup>57</sup> 徴兵制をめぐる政治的な議論については、R. J. Q. Adams and P. Poirier, *Conscription Controversy*, Columbus, 1987 に詳しい。
- <sup>58</sup> 開戦前、イギリスの女性による政治的要求が高まっていた。ミリセント・ガレット・フォーセットを会長とする婦人参政権協会全国連合 National Union of Women's Suffrage Societies や、エメリン・パンクハースト(パンクハースト夫人)とその娘のクリスタベル、シルヴィアを中心とする婦人社会政治連合 Women's Social and Political Union [以下 WSPU と略す] に代表される団体が、それぞれ1897年と1903年に結成され、前者が穏健路線をとったのに対して、後者は運動の過激さを増していった。Robb, *British Culture*, pp. 36-38; 村岡・木畑編、前掲書、246-248頁。開戦後、これらの婦人団体は戦争に協力する。その過程については次節で検討する。
- <sup>59</sup> Wilson, *Myriad Faces of War*, pp. 411-412.
- <sup>60</sup> C. M. Tylee, *The Great War and Women's Consciousness: Images of Militarism and Womanhood in Women's Writings, 1914-64*, Iowa City, 1990, p. 36.
- <sup>61</sup> M. Rickards, *Posters of the First World War*, London, 1968, p. 41.
- <sup>62</sup> このポスターについて、スコットランドの抗夫の指導者は、「『私は血なまぐさいことを止めようとしたんだよ』と答えるだろう」と述べたということである。Marwick, *Deluge*, p. 52; Simkins, *Kitchener's Army*, p. 123.
- <sup>63</sup> Gullace, *Blood of Our Sons*, p. 43.

- <sup>64</sup> WSPU の機関紙である *The Suffragette* は、戦時中に *Britannia* と改名された。パンクハースト夫人が国内で様々な募兵集会で演説した一方で、クリスタベルはアメリカに渡り、イギリスの参戦の正当性を訴えた。もっとも、パンクハースト一家でも、娘のひとりであるシルヴィアは戦争に反対した。 *Ibid.*, pp. 87-88, 119-129.
- <sup>65</sup> *Ibid.*, pp. 87-88.
- <sup>66</sup> こういった歌の歌詞の例として、「ああ、私はあなたを失いたくありません。でも、私達は、あなたが行くべきだと考えます。あなたがそうすることを必要としている、国王と国のために」というものが挙げられる。Wilson, *Myriad Faces of War*, pp. 705-706.
- <sup>67</sup> *Ibid.*, p. 158.
- <sup>68</sup> この運動について、シムキンスは、「これらの女性の敵意は、戦う気力を持たない男性にとっては、軍旗や銃を持った敵と同じくらい恐怖の対象であった」という当時の回想録を引用しているが、しかし、それは一部の女性のヒステリーのような活動であり、志願者の数にはほとんど影響がなかったとしている。Simkins, *Kitchener's Army*, pp. 124-125. 一方で、ガレスによれば、1964年のBBCによる第一次大戦50周年を記念した番組においてこの事例について触れられたとき、「これらの女性が、現在の女性ほど騒々しかったかどうかは疑問です」というコメントがなされたところ、白い羽根を受け取った男性、あるいはその家族からの手紙が殺到したということである。そのうちのひとつでは、父親が仕事から帰る際に白い羽根を受け取ったことについて、「私は当時6歳でした……私の父は臆病ではありませんでしたが、病気だった私の母親や、まだ3歳の妹を残して入隊することをためらっていたのです……父は直後に入隊しました。私は、父がいかに動転していたかを忘れることはできません」と書かれている。なお、このとき、白い羽根を渡した女性からの反響はわずか2通しかなかったという。N. Gullace, "White Feathers and Wounded Men: Female Patriotism and the Memory of the Great War", *Journal of British Studies* 36, 1997, pp. 178-206; *Idem*, *Blood of Our Sons*, pp. 73-97. なお、上記の手紙は以下より引用した。 *Ibid.*, pp. 78-79.

## 図表

表1 第一次大戦期イギリスの入隊者数

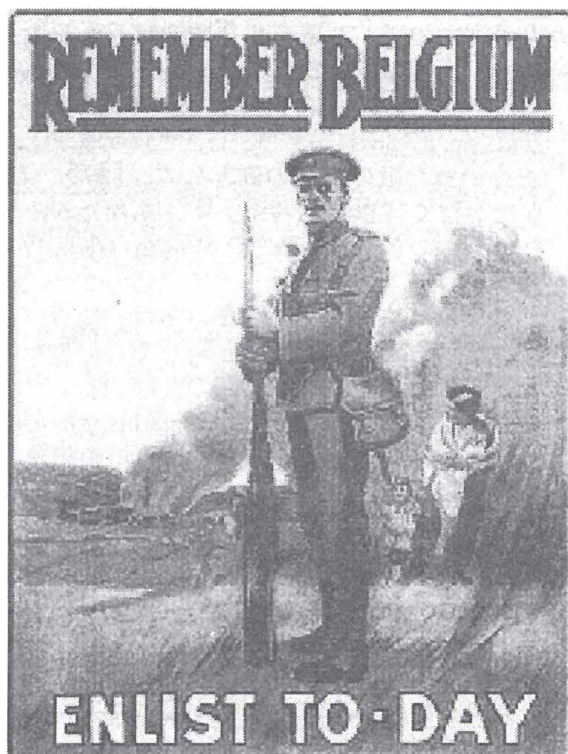
	1914	1915	1916	1917	1918
1月	—	156,290	65,965	85,669	35,150
2月	—	87,896	98,629	118,841	33,722
3月	—	113,907	129,493	119,539	30,197
4月	—	119,087	106,908	87,032	78,298
5月	—	135,263	125,768	88,894	84,019
6月	—	114,679	156,386	81,714	88,950
7月	—	95,413	88,213	60,367	59,360
8月	298,923	95,980	111,771	49,359	29,918
9月	462,901	71,617	81,195	37,342	22,550
10月	136,811	113,285	97,684	36,543	23,768
11月	169,862	121,793	76,058	30,823	7,530
12月	117,860	55,152	52,005	24,923	—
総計	1,186,357	1,280,362	1,190,075	820,646	493,462

Grievess, *Politics of Manpower*, pp. 217-218 より作成。

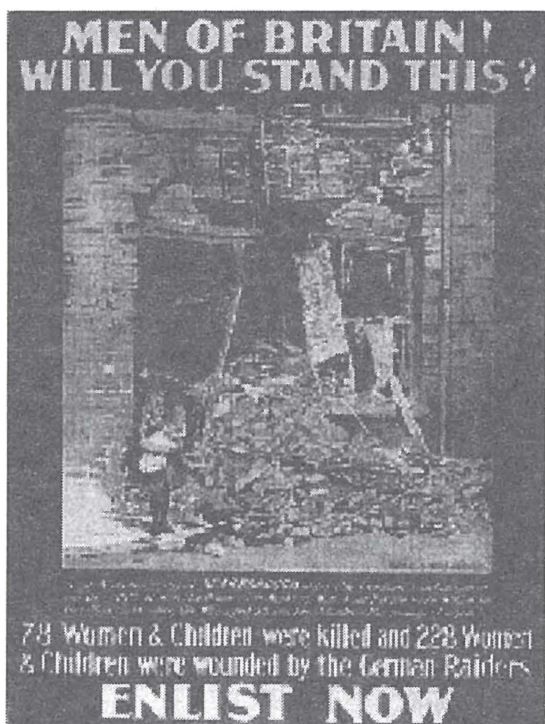




(図 1)



(図 2)

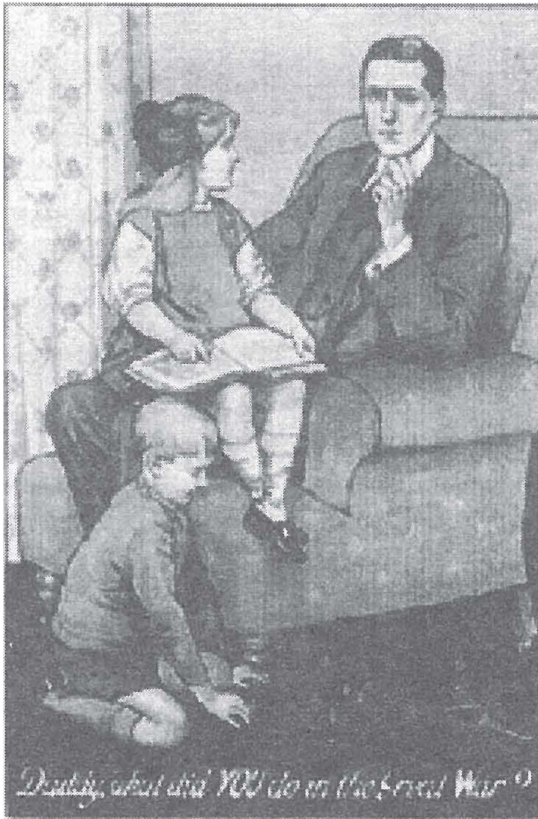


(図 3)



(図 4)





(図 5)

図 1 : *Your King & Country Need You*, 1914. PRC Poster No. 18.

出典 : Dutton, “Moving Images?”, p. 56.

図 2 : *Remember Belgium*, 1915. PRC Poster No. 16.

出典 : Dutton, “Moving Images?”, p. 50.

図 3 : *Men of Britain!*, 1915. PRC Poster No. 51.

出典 : Dutton, “Moving Images?”, p. 50.

図 4 : *Women of Britain Say ? “Go!”*, 1915. PRC Poster No. 75.

出典 : 木村靖二『二つの世界大戦』、山川出版社、1996年、カバー裏

図 5 : *Daddy, what did YOU do in the Great War*, 1915. PRC Poster No. 79.

出典 : Dutton, “Moving Images?”, p. 51.